

# 見出された多様な価値

## ——ミクロネシアにおける世界遺産申請の過程から

かわの まさはる  
河野 正治

筑波大学大学院博士後期課程

世界遺産登録に対する期待は、どの国（地域）でも大きい。しかし、世界遺産の制度が知られている国とそうでない国とは、反応が少し異なっているようだ。

### 竜宮城ならぬナン・マドール

ミクロネシアのポーンペイ島で調査をしていたある日のこと、島民の男性と話をしていると、彼は得意げにこんなことを言い始めた。「浦島太郎の話なら聞いたことがあるぞ。浦島太郎はナン・マドールにやって来たんだろ」。

日本に統治された戦前の一時代（一九一四〜四五年）の名残だろうか、それとも島に伝わる海底都市伝説の変形だろうか。ともかく竜宮城ならぬナン・マドールは、ポーンペイ島にある。海上都市さながらの景観は、外部者から「太平洋のベニス」と形容され、島民に限らず、海外からの関心も広く引き寄せている。大小約九五の人工島が海上に浮かびひとつの壮麗な空間をつくる様子は、古代王朝独特の強さと美しさを伝える。

ドールは、ポーンペイ島にある。石造の巨大建造物の一群である。ポーンペイ島は、ガムの南東、赤道のやや北の太平洋の海にある。淡路島の三分の二程度という小さな島ながら、一千年ほど前にはナン・マドールを拠点とする強大な王朝があった。王朝はおよそ五〇〇年前に外來勢力（現在の伝統酋長の祖）により征服されたが、脈々と伝えられる口頭伝承が示すように、ナン・マドールを特別で神聖な場所と考える住民も少なくない。

### 太平洋のベニス

人工島はそれぞれに固有の名前や伝承をもち、各島の間には水路が張り巡らされている。これらの人工島にはおもに玄武岩で築かれた幾つもの巨石建造物



みごとな玄武岩の石積み。長さ五メートルにおよぶものもある（撮影・関根久雄）

がある。王の墓や儀礼場として利用されていたようだが、建造時に大量の巨大な岩がどのように運搬されたのかは、今でも謎のままである。

ナン・マドールは、太平洋で広く見られる巨石文化のなかでもっとも大規模で壮麗な遺跡のひとつであり、いつ世界遺産になっても不思議ではないと専門家や政府関係者のあいだで言われてきた。

### 遺跡をめぐる多様な価値づけ

数年前、ミクロネシア政府はナン・マドールの世界遺産登録に向けた準備に舵を切った。現在は申請中であり、近い将来に登録される見通しだという。申請の過程では、伝承に根ざした巨大建造物というだけに留まらない多様な価値が見出された。

まず、観光資源としての期待が膨らんだ。米国からミクロネシア連邦への財政援助期間（一九八六年〜）が満了予定の二〇二三年を控え、政府は経済と財政の活路を観光に求めており、世界遺産はひとつの希望である。さらに、世界遺産化に向けて保存意識が高まり、気候

変動や観光客への対応が見直されている。他方、ナン・マドール近辺で暮らす住民には、遺跡や土地の権利をめぐる不安も生まれた。遺跡を保護する伝統酋長や地元NGOは、遺物の持ち去りなどを警戒し、外国人による発掘調査を時に拒絶させた。遺跡の入場料として支払われる三米ドルを収入源とする地権者は、世界遺産登録によって徴収の権利が奪われるのを恐れた。世界遺産の認定後は、遺跡を管轄する伝統酋長の権威が高まる

一方で、島内の他地域の伝統酋長とのあいだに溝が生まれることも予想できる。世界遺産の申請は、ナン・マドールの遺跡としての価値を高めただけでなく、島民や政府があらたに遺跡の価値を見出すきっかけとなった。だが、世界遺産化の動きに自覚的な島民はまだまだ少ない。今後、世界遺産をめぐる彼らがさまざまな紡いでいく価値は一体どんな軌跡を辿るのか。興味深くも慎重に見守るうではないか。



ナン・マドールの平面略図



井桁状に柱状玄武岩を八メートルにも積み上げた酋長墓の周壁（撮影・関根久雄）



海上都市のナン・マドールは、海路からの観光も楽しめる（撮影・片岡修）



島を一周する道路からはナン・マドールの看板が見える（撮影・関根久雄）

